

「リバタリアニズム」という言葉は、サンデルの「白熱教室」以来よく聞かれるようになった。そこで彼がロールズ流の福祉国家論とともに批判の対象としたのが、個人を最大化し国家を最小化するリバタリアニズムであった。

トランプ再選のかかる来秋には、この考えに親和的なミネアポリス世代が最大の有権者層になるというから、本書でその概要を知ること意義は大きい。

リバタリアンは、民主党・共和党どちらにも満足しない。というより、政府の存在そのものに拒否感をもつ。個人の自由に至上の価値を見いだし、福祉や所得の再分配は国ではなく個人に委ねる。社会的には寛容で、移民や宗教、麻薬使用や妊娠中絶も、政府ではなく市場と個人が決定すべきだと考える。権力、とりわけ独裁権力は反対だし、同調を求める思想は

渡辺 靖著

## 個人最大化する米国の思想

ポピュリズムでも人種主義でも社会主義でも一切お断りである。

彼らは保守ではなく「原保守」と呼ばれる。白人中流層が輝いていた公民権運動前の古き良き時代を理想とするからだだが、もう少し遡ると、自律的市民による統治という建国以来の古典的なりべリズムに行き当たる。アメリカは、その発端からして旧世界を否定

し、権力への異議申し立てによって生まれた国である。リバタリアニズムこそ、シェファソンらが目指した本来のアメリカ的正統とも言えるのである。

なぜ今、それが注目を浴びているのか。背景には、金融秩序への政府の介入で資本主義が機能不全に陥り、国家主権と民主主義との相克で国際秩序も瓦解しかかって

いる現実がある。ただし、著者も記す通り、個人がどこまで自律的で合理的なのかは別問題である。成人間の合意さえあれば、売春も奴隷契約も臓器売買も可となると、個人や生命の尊厳も脅かされるという矛盾に陥らないだろうか。

著者は1年間のサブタイカルを最大限に活用し、各地の研究所やシンクタンクを訪れてインタビューを重ねた。道徳教育から大学定員まで政府に口出しされても平気な日本からすると、とても信じられない話の連続だが、これも左右の陣営を越えて人びとが心に感じている「ディープストーリー」の一端なのである。

著者は1年間のサブタイカルを最大限に活用し、各地の研究所やシンクタンクを訪れてインタビューを重ねた。道徳教育から大学定員まで政府に口出しされても平気な日本からすると、とても信じられない話の連続だが、これも左右の陣営を越えて人びとが心に感じている「ディープストーリー」の一端なのである。

## リバタリアニズム



(中公新書・800円)

わたなべ やすし 67年  
札幌市生まれ。慶応大教授。  
著書に『アフター・アメリカ』、『文化を捉え直す』など。

《評》 国際基督教大学教授

森本 あんり